

新しい風に吹かれて～新年度特別号～



新スタッフ漆山と平さんの一コマ

## 新たなグループホームの舞台に立って

GH2主任 板垣 由紀子

新卒者を迎える時期になった。去る人、迎える人、春は出会いと別れの季節、感傷的になったり、不安になったり、わくわくしたり、とても心が忙しい季節だ。

私も今年度は、住み慣れた第1グループホームを離れ、新天地、第2グループホームへ移動となった。入居から1年半担当したKさんに、移動をどう伝えようかとタイミングをみていたが、ついに最終日になった。その日は、送別会。私も送る側に座っていると、花束がKさんより私に突然手渡された。びっくりしたのと嬉しかったのと、複雑な思いで受けとる。Kさんの心境は？

表情は、にこやかだった。バラの花とかすみ草のブーケのような花束を受け取り、二人肩を並べ写真に収まった。そして入浴時、私は伝えられずにいた移動の話を、背中を流しながら伝えた。「そうか」とひとことことあっただけで後は静かに背中を流すだけ。湯船に静かに沈んだ表情はとても穏やかで安心した。「すぐ隣だし、遊びに来てね。」と声を掛けその場を後にした。

さて移動先の食事時間、よそ者の空気で座っている私に、唯一関わって来てくれるHさんがいた。「きれいですね～」がHさんの切り口だ。「きれいですね」と私も返したが、次の瞬間おかずが一品消えていた。さすがに早い。私は思わず笑ってしまった。

そうこうしていると、またまた「きれいですね～」とHさん。「きれいですね・・・でもまだ食べてます」と返すと、「わがってら、うるせ、さる、くちやがまし」と悪口が来る。なんか楽しくなってくる。不思議だけどいやじゃない。そうしているとHさんは〈ごつん〉と私の頭や背中を叩いて去っていく。数分後にはまたやってきてくれる。今度は私がおしりをポンと叩いて返した。

スタッフは気にして「こんな難しい人に最初から大丈夫だろうか」といった心配をしてくれているのを感じた。しかし私にすれば、まだ顔見知りでもなく、なじまないところで、誰もが遠巻きにしている寂しさのなかで、「きれいですね」と「うるさい、サル」などと悪口とおべっかでどんどん関わってくれるHさんに歓迎されているような気がしていた。今日は何回「うるさい」と言われるかな？「きれいですね」攻撃になんと言って返そうかなと色々考えたりしている。

キッチンで洗い物をしていると、私のおしりをぼんぼんと2回叩く人がいる。振り返ってみるとHさん。にやりと笑って去っていった。その顔に、やった、つながったと、こころが震えた。Hさんは先ほどおしりを叩いた私に、かたきを伐っていったのだ。まだまだつながれる。ゆっくりとこうしやりとりの中から、ひとつひとつ物語を紡いでいきたい。物語は今始まったばかりだ。



我々は現代社会のなかで、便利と豊かさを享受している。その本質は心を使わなくてすむようになったことではないか。これは大変楽なのだが、生きる実感を無くしてしまう危険がある。そのことにはなかなか気がつかないでいる。

近代科学は急速な発展に寄与したが同時にそれは、心を使わないことの普及でもあったのかもしれない。心を使わないから客観的とか普遍的とかいいやすい。「個人的な感情は入れてはならない」というのが近代科学の基本的な姿勢だ。小林秀雄はそんな考えは、人類何万年の歴史の中で、たかがここ300年の浅知恵だと言わんばかりに喝破している。その講演記録をCDで聞いた茂木健一郎は「ここに同志がいた」と深い共感を寄せた。茂木は独自の概念である「クオリア」を小林が知ったなら、「君、それが僕の言いたいことだよ」と賛同するにちがいないと言っている。

我々の生活の周辺はその科学一辺倒に覆われ、これが私には息苦しい。特に認知症の周辺は脳ブームのせいもあって、前頭葉だの脳ドリルだの、いかにも科学的な証明のもとに、それが救いのように出されてくる向きがある。こうした動きに脳科学者茂木氏は「馬鹿じゃないの、そんなことで人生の問題が解決するわけねーだろ」と言い放った。我が意を得たりで大いに溜飲を下げる思いだったが、便利と豊かさのなかで大きな不安を抱えてしまった現代人はさらなるごまかしを必要としているのかもしれない。

そうした現代の混迷と不安に、果敢に攻勢をかけてくるのが、認知症の人たちの存在であると感じさせられてきた。銀河の里も7年目に入る。経験もないまま、認知症の人たちとの暮らしのなかで生きることを大切にしようとしてきたのだが、認知症の人の存在の大きさに圧倒され、感激と驚愕の連続だった。その威力、迫力、人間らしさに満ちあふれた世界は、陳腐で貧相な生き方ばかりの現代人のなかで燦然と輝いている。心を動かさない近代科学主義の原則のもとで、便利と豊かさを享受し、およそ関係性を排除しきった現代人の我々に、強烈な関係を求めてくる、実に人間的な存在だ。

その存在は他の障害も含めて、現代社会における数少ない、大きな可能性と希望に繋がっていると感じてきたが、今それは確信になりつつある。銀河の里は認知症の利用者の存在に支えられ、教えられてきた草創期の6年を越え、今後10年に向けて、認知症や障害のもつ価値や可能性、そこからもたらされる希望について、より深い探求の道を行くことになるのだろう。

探求、研究は時代の突端で苦悩し知力の限りを尽くし、心のエネルギーを駆使して新たな発見に挑むということだと思ふ。これまで通り、農業を基盤に「暮らし」を作り、その中に生きることのリアリティを実現しつつ、科学、芸術、哲学、宗教性をふまえたまなざしで人間と生命を見つめて行きたい。それらがそろって初めて認知症や障害は人間全体に付置され立体化されることになる。そうでなければ「扱った」に過ぎず、「生きた」にはなっていない。その意味で今、我々の前に現れている、「脳」「農」「能」の三つのノウに取り組み、迫って行きたい。

ニューフェイス7人を向かえた7年目は、これまでとは違った大きな節になるような予感がある。組織体勢も大きく変わり、居酒屋など社会参加も本格化してきている。「自分らしく生きること」に風当たりの強い地域ではあるが、誠実に真摯に歩いていくしかない。時代の突端で、スタッフ個々の奮闘がどんな発見をし、可能性を切り開くか期待をしたい。また、出会いが関係を育み、そこに新たな物語が生まれてくることを楽しみにしている。

食彩空間

心和む時・・・ 心豊かな空間・・・ 営業時間: 月～木 14:00～17:00 デイテ 17:00～23:00

悠和の杜

そんな、心と体においしい店

TEL:0198-23-6663 FAX:0198-23-6663  
〒025-0085 岩手県花巻市双葉町2-16

<イベントのお知らせ>

★ジャズとワインのタペ

出演：中山英二&山口友生

日時：5月9日（水曜）

start 19:00～

チケット：5000円（軽食付）

★（女優）二木てるみ

花巻「悠和の杜」公演

日時：5月21日（月曜）

内容：（予定）遠野物語など朗読

<好評！会席プラン>

3000円・5000円・10000円コース

料理の内容は、お客様のご要望にお応えします。

当店おすすめは、「創作酢豚」、（手作りの）「里のソテー」

特製！鉄板餃子」です。ぜひご賞味ください。



<生演奏> start 19:00～

♪金曜日：Piano（吉野茂氏）

♪土曜日：Guitar 弾き語り

（邪無：多田友好氏、照井やすし氏）

♪日曜日：Piano & Flute

（吉野茂氏・米澤里美氏）

毎週それぞれ開催中。

心のこもったお料理と音楽をお楽しみください。



5月中旬待望のランチスタート！！

只今準備中。沢山の方々のご利用をお待ちしております。

\*ワークステージ「銀河の里」にて、

仕出しや弁当を承っております。







グループホームの入居者Fさんは、食べ物にこだわりがあり、かなりの美食家だ。頼まれていた生エビ、輪切りのパイ、ヨード卵を買って、Fさんの部屋へ届けた。すると気前のいいFさん「オメ、ここで一つ食べていげ」と私にパイをくれた。二人でこっそり甘くておいしいパイをいただいていた。

そのうち何を思ったか突然「Kさんにも一つやるがなあ。持ってってけねが？」と言うので私は驚いた。Kさんは同じグループホームの入居者だが、今年に入ってから病気がちで、部屋で過ごすことが多く、以前のようにリビングにでてみんなと過ごす機会は減っていた。そんなKさんを気遣ってなのか、Fさんのその思いやりに、私は驚きながら胸が熱くなった。

これは是非ともKさんに届けなければと思って部屋から出ると、他スタッフからKさんはパイが嫌いだったはずというので困った。一瞬迷ったが、どうしてもFさんの気持ちを届けたく、Kさんの部屋へ持って行った。

私の心配をよそに、Kさんはとても喜んで、パイもほとんど平らげてくれた。確かにパイは好きではないのかも知れないが、Fさんの気持ちを受けとめてくれて、おいしそうに食べてくれるKさんがいた。

二人は直接言葉こそ交わさないものの、気持ちの繋りを感じた出来事だった。しがらみや監視社会のプレッシャーとストレスがきつくなるばかりで、ほっとしたり、胸が熱くなるような話は世間からは急速に無くなりつつある。グループホームに昔の地域の、ご近所の関係、助け合い、いたわりあいの精神が生きていくとよいな。私もここでそんな関係を生きていけたらいいなと思った。



## 光 と 闇

わらび座ミュージカル、「銀河鉄道の夜」の最終日、グループホームの利用者Tさんの誕生日のお祝いも兼ねて、同じ利用者のYさんと3人ででかけた。ぎりぎり席に着いて、真っ暗になる会場。あれYさん座れたかな・・・なんて思っていると、幕が上がった。そのステージには吸い込まれてしまいそうな天の川があった。同時に会場を満たす音楽に、私たちはすっかりと別世界に入り込んだ。舞台の天の川の光に照らされて、Yさんの見入る姿も見えた。

舞台の力、音楽ってすごい。あらためてそう思わされた。音に導かれ、舞台の世界にすっかりと浸りながら、自分自身の追体験が巻き起こり、感情がぐるぐると揺り動かされる。

“僕はもう、あんな大きな闇の中だってこわくない。きっとみんなの、ほんとうのさいわいを、さがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んでいこう。”

銀河鉄道の旅で、さまざまな人と出会って別れていく中で、「ほんとうのさいわい」が何なのかを考え始めたジョバンニとカムパネルラ。その終わりのほうで、石炭袋（ブラックホール）を目の前にした、ジョバンニの語りだ。

そこで、わたしの中の古い記憶が引き出されて、涙が止まらなくなる。3、4歳の頃だったか、ある夜、居間で父親のあぐらの上に座っていた。開けられた戸の向こうに真っ暗な座敷があり、そこに「鬼がいる」と私は父親に訴えている。父はその私をあぐらの上で抱え続けていてくれた。父は座敷へ行って電気をつけ「いないよ」と照らしたりはしなかった。私も、鬼がいないと言ってほしかったのでも、退治してほしいわけでもなかった。むしろ、父が退治に向かったら、とても不安だったろう。座敷に鬼はいるけど、それでも大丈夫だといった、そんな不思議な安心感があった。

闇と対峙しながらも、揺らぐことのないころの強さ、それをもたらしてくれる誰かの存在、あなたとわたしの関係。「ほんとうのさいわい」は、そこにあるんじゃないか。闇を恐れ、闇から逃げようになんでも明らかにしようとして、光をあて続けている現代人は光を当てることで自分の中の不安から逃げようとしているようだ。そうして時代が露出オーバーになり、光の当たらないところは無いくらいになった。世の中から闇は排除され人間のところにばかり深い闇ができる。父のあぐらの中で私は闇を怖いとは感じていなかった。むしろ闇とそこに住む鬼を見つめていたように思う。そのとき私は闇の主の鬼と繋がっていたのかも知れない。それから時を経て今のわたしの不安は、闇を失い、何とも繋がっていない自分の所在のなさからくるのではないか。

ジョバンニとカムパネルラはなにかとつながり、闇との対峙を恐れなかった。その一体感は、二人があつた世とこの世に別れ別れになろうとも消えることはなかった。

この演劇を見た3人とも、今、それぞれ色々あって、みんな戦っている。そこまで気負う戦いじゃないのかもしれないんだけど、みんなぶきっちゃなので、ちょっとやりすぎたりしている。疲れたところで握ってた手をゆるめたり、力こめすぎて相手から手を振りほどかれたり、ほどよい力加減を発見したりしながらやっている。そうしたやりとりは楽ではないけれど、愛おしいとわたしは感じる。



季節はずれの雪が舞う3月の半ば、私は銀河の里へやってきた。社会人としての第一歩を踏み出す覚悟と、これからへの期待と不安で胸がいっぱいだった。

そんな私の緊張を解してくれたのがEさんである。「咲いた～、咲いた～、チューリップの花が～」と、手拍子と共にEさんの声が響き渡る。数えるほどしか会っていないのに、Eさんの顔を見た私はなんだかほっとしていた。

ある日、そのEさんが「家に帰る」と、スリッパのまま外へ出た。私は慌てて追いかける。必死で止めようとするが、Eさんは私の言葉を聞き入れない。「私はあなたのこと知らないんだから。勝手に帰りなさい。」と言いながら、私の手を振り解くEさん。思いがけない言葉と行動に戸惑う。しかし、後からこれまでのEさんについて色々な話を聞き、私はEさんのことをまだ何も知らないのに、何をわかった気になっていたのだろうと思った。笑顔で語りかける姿も、帰ろうと足早に歩き続ける姿も、全部ひっくるめてそれがEさんという人間なのである。あの時のEさんの言葉は、そのことを暗示していたのかもしれない。

後日、Eさんと手を繋いでデイサービスを訪れた。そこでいつものように歌を歌うEさん。その瞬間、「うるさい！朝っぱらから何だ！出て行け！」と、利用者さんの言葉が飛ぶ。いつもの「帰ります。」になってしまうかもしれないと思いながら、なんだか私自身もここにはいけないような気分になり胸が苦しくなった。が、その時のEさんは、何もなかったように私に笑いかけていた。またEさんに救われたのだと感じた。

私の手を握るEさんの手は温かい。これからゆっくりと関わりながら、手と一緒に心も繋がれたらと思う。



### 別れと出発の時 ～Mさんを振り返る～

戸來 淳博

デイサービスの開設間もない頃から6年間通ってくれていたMさんが先日亡くなられた。入院された時点で、どこかで覚悟はしていたのだが、いざ亡くなると辛かった。葬儀の案内をいただき参列させてもらったのだが、立派な葬儀で、仕事仲間も多く参列されており、私の知らないMさんを見るようだった。

お孫さんが弔辞の中で、「おじいちゃんは、デイサービスを楽しみにしていて、休みの日も玄関で迎えをまっていました。おじいちゃんにはそのことがわからなかったみたい。でも毎日のように銀河の里に行くおじいちゃんを見て、自分たちもがんばらなきゃと思いました。」と言われた。Mさんとお孫さんの穏やかで暖かい関係を感じると共に、お孫さんのおじいちゃんへの素直なまなざしに心なごむ思いがした。



Mさんにとって、ほんの一部でしかないと思っていた里のデイサービスでの6年間は、Mさんにとっても、家族さんにとっても大切な時を過ごしておられたのだと感じた。

私にとっては、経験も知識もないところを、デイサービスの主任を任せられ、手探りで、悪戦苦闘の6年だった。その私のかたわらにいつもMさんはいてくれた。

葬儀後私はMさんの事を思い出しながら書庫から写真の束を取り出ししてみた。6年前、開所間際の写真は、みんな若かったなと感じるくらいすでもう懐かしい。デジカメになる前、フィルムで撮った写真の束。当時、デイの男性陣5人が里の畑やハウス、建物の周辺に出掛けて作業をする姿があり、誰がよんだか彼らを「男衆」と言っていた。それぞれデイサービスとってはいなくて、定年後の再就職場所のつमりのSさん、近所や知人の作業を手伝う、結いのイメージのYさん、本当は温泉に来てくつろいでいたのに、黙ってみていられなくなったHさん。それぞれのイメージで里に集い、過ごしていた。

Mさんは、まっすぐな性格で、こうと決めたら修正のきかない所があった。こちらの都合もお構いなしの所があって、Mさんに合わせるしかなかったり、Mさんとぶつかる事もあった。

二ワトリのえさやりが日課だった時もあった。秋に収穫期を迎えた大豆が気になりだして急遽畑に出かけたこともあった。デイサービスの枠を越えて、畑や田んぼ、グループホームと縦横に行き来し、つないでくれた。

また、まっすぐなまじめさと裏腹に、遊び心も旺盛で、ただの仕事にしないふところがあつた。作業を始めてすぐに「もうやめた！帰る。」と言って、周りを驚かせ、自分はフフフと笑っていたりした。

種まきの時は、苗箱を友人のYさんが3枚もてば、Mさんは4枚持とうとする。張り合いながら、Yさんとの掛け合いを楽しんでいた。積み重ねた苗箱がバツリ倒れて、みんな青ざめている中で、吹き出して笑うMさんがいた。Mさんの存在が、単純な作業を脱線させ、遊び心でほっこりさせたり、厳しい状況で救ってくれたりした。そんなMさんとともに、デイサービスはかたち作られてきたんだと感じる。

新年度を迎え、私はデイサービスから少し離れ、相談事業に関わっていく予定だ。新しい道をまた行くわけだが、Mさんと一緒に過ごした感触が、次の旅立ちの勇気になる。今、Mさんを振り返りながら、別れがあつたにも関わらず、Mさんがより身近に感じられるように思う。これまでMさんに育ててもらったことに感謝しつつお別れを告げ、私は新たな旅を歩んでいきたい。



## 歌返し 昨日の歌を今日返す 明日は明日 今日になるまで



Tさん(男性)の94回目の誕生日にKさん(女性)の言葉。いつもはあまりリビングに出てこないKさんだが、Tさんの誕生日だからということもあって、会が始まって少遅れてリビングへ出てきた。歌好きのKさんからTさんに歌のプレゼント。歌で会がさらに盛り上がるが…。ケーキ、おやつを食べ終わると一人また一人と、自室へ行ってしまった。「おれの歌、聞きたくなくてみんな行くのか?」とKさん。「そうじゃないよ、Tさんは聞いているしYさんも居るよ」と言うとまた歌い始めるKさん。そして、「人間一寸先は闇、だから今ここで楽しまない。おれが居るここを楽しまない」と言葉をそえる。その言葉を聞いてYさんが「哲学だね」と一言。「あの時歌えば良かったって思っても次の日どうなるかわかんねんだ、人間だおん。」  
「誕生日も今日しかねんだ、歌うのも今しかない。明日は明日の日なんだ」

次々に私の心にズズシくる言葉を放つ。

確かに今ここに居ること、在ることに、心を揺らしながらいいたいと思わされたTさんの誕生日のお祝いだっただ。

翌日、TさんがふらっとKさんの部屋におじゃまして、Tさん18番の君が代を歌っていた。昨日の誕生日のプレゼントの歌にお返しをしている感じがした。しばらくKさんの部屋では歌と話で花が咲いていた。

## 新体制始まりの予感 ～久しぶりの外食～

DS 熊谷 優希



デイサービスの利用者全員で、久しぶりの外食へと出掛けた。最近特に個性派揃いのデイサービス、緊張感に満ちた日常で外に出る気持ちが薄れていたところ、クイさんの「お寿司食べに行こう」という一言で外食が実現した。クイさんは久しぶりの外食に「へそくりならいっぱいある。ほれ、こっちのポケットにも、こっちのポケットも」と戯けてみせ、当日は本当にポケットからへそくりが出てきた!

回転寿司に入り「どうも、どうも」と店員に向かってクイさん挨拶。オキタさんは回ってくるお寿司にソワソワ。一体どうなるこの外食!!と落ち着かない私。クイさんは「はらいっぺだ」と苦しがりながら11皿もたいらげた。斜め向かいに

座っていたトヨさんが「おめさんそんなに食べたら腹苦しくなるのも当たり前なんだじゃ」と一皿ごとに、呆れちょっとピリピリした口調で声を掛ける。その度に「食い納めだ」などと動じず返すクイさん。そのうち急に吹き出して笑いだしたトヨさん。一瞬スタッフの間で緊張のはしたつ雰囲気も急に和やかになり、お腹も気持ちもちも満足な様子のクイさんと腹から笑ったトヨさんの一コマ。

トヨさんは寿司は2皿と少なめ。お寿司はもういらないと断り、大満足したのはチョコバナナ。「これ、バナナだってか…?」と生クリームとチョコで塗り固められたバナナに驚いた様子。口にしたらたん、「これ、美味しいもんだな」とペロっとたいらげた。おまけに「寿司はいらね、バナナなら食べる」ともう一皿追加しながら「これバナナだってか?」と再び首をかしげている。『礼に始まり、礼で終わる』クイさんは「どうも」と挨拶をし



てお店に入ったが、帰りも「兄ちゃん、美味しかったよ。ごちそうさま」と店員に挨拶。店員さんも動かしていた手を止め礼をし「ありがとうございます。また来てください」とクイさんの言葉をしっかりと受け止めてくれた。日常生活の中で見ることの出来ない表情や、出会った人と繋がり、偶然やってくる出来事。「事なかれ」とは逆の「こと起これ主義」の銀河の里だが、この外食も波瀾万丈の1日なるのではという心配をよそに、いつもと違った一人一人の表情を見ることができた。新年度を迎え、そして新しい利用者を迎え、今年度のデイサービスも利用者の豊かな表情を楽しみに頑張っていきたい。



彼岸になると、祖父母の命日が近いこともあって、親族が集って墓参りをする。クリスチャンの家系なので、祖父の好きだった賛美歌を歌い、お祈りを捧げる。叔父や従兄らは医者など理数系の職業の者が多く、叔母や従姉らは幼稚園の先生や芸術家が集まっている。

今年のお祈りを聞きながら、正直、驚いた。「希望」や「光」、「喜び」「慈しみ」ばかりで生きていけますように、神様…といった感じなのだ。西洋的な思考がモロに現れている。「絶望」や「闇」、「悲しみ」「憎しみ」はあってはならないのだろう。いや、そりゃそうだ、でもちょっと違和感…。

墓参りの後、恒例の食事会をする。年に数回しか顔を合わせない者同士、食事をしながら話に花が咲く。自然と男同士、女同士と席が決まってきて、私はちょうどその真ん中辺りに座っていた。両サイドの話題を交互につまみ聞きしていた。

男性陣の話題は、脳科学ブームもあってか、「記憶」のシステムについて最先端の科学はどこまで解明できたかといった内容。医者や叔父が医療の立場から講釈をたれと数学者の父が疑問を投げかける、といった具合で論理的に盛り上がっている。最後には「鏡の世界は左右反対に映し出されるが、では、なぜ上下は反対に映らないのか、説明せよ」などという小難しい話になって、「どうだ、なっちゃん、説明できるか？」

逃げるように女性陣に入ると、子育て談義に盛り上がっている。子育て真っ最中の従姉もいて、みんな母親らしい感情が豊かに引き出された内容。保育現場からの意見も出たりして、「あんたも早く子ども産みなさい」ときた。私は、「はいはいはい…」と、耳をふさいでまたまた退散。どちらの話題にも居づらくなくて、子どもとしりとり遊びでもする他ない…。

海馬がどうのシナプスがこうの…と、人体、脳内の細部にまで切り込んでいかねば気が済まない男性陣と、他人の子も自分の子も関係なく、人類全体の子どもを育てるっていうくらいな、おおらかな女性陣との相違がくっきり。

西洋の、言語や論理の光を照らすことで、すべてを明らかにしていくという科学の方法は「父性的」な力を感じる。大地から生を産み出す「母性」は、泥臭くて曖昧でナンデモアリのな、一方ではなんでも飲み込んでしまう力を持った、ちょっとオソロシイ？東洋的な感じが強い。どちらが良い悪いではないが、科学全盛時代の「光」に対して、次世代には、混沌の中に可能性をたっぷりと含んだ「闇」の価値も必要ではないか。闇を無しにするための光ではなく、闇と向き合う感性や感覚も大事になってくるはずだ。西洋と東洋が真剣に出会う今世紀に、日本の女性が貢献できるのは、「闇」の威力と魅力を持ってしてではないかと感じる。

食事会の終わり頃、科学的議論に花を咲かせていた医者や叔父が、遊び心いっぱいと言う。「あ、ほら！今、おじいちゃんとおばあちゃんが、千の風になって、ここ、通り過ぎて行ったぞ！」

「お、通ってた？わ〜！」と手をたたき一同盛り上がる。

クリスチャンで西洋化されたような親族だけややっぱり日本人。いいんじゃない？

この2年間、英語の特訓を続けてきた私は悠太君と二人で、今月オーストラリアに語学留学で出発する。日本と、日本人としての私を見つめていきたい。

## 書評

宮澤 京子 『ワキから見る能世界』安田登著 2006年10月 生活人新書 NHK出版

ここ数年、能舞台で繰り広げられる夢幻能の世界に引き込まれ打ち震えた興奮がやみつきになり能にはまっている。能にシテ、ワキという役がある。シテは主役と一般的には理解されている。では、ワキは脇役かという、それは全く違うというのがこの本の内容だ。

グループホームの現場に生きる我々には、この本でいうワキの意味が生き生きとした実感をもって理解できる。認知症の世界におけるシテである高齢者と、ワキであるスタッフというふう置き換えた時、その関係は能の本質そのものに通じる。

能楽士でもあるこの本の筆者はワキの2つの役割をこう解く。1つは、不可視の存在の幽霊であるシテを、観客に「分からせる、見せる」。もう1つはシテの乱れに乱れたぐちゃぐちゃ状態を快刀乱麻を断つごとく「分け」、そして「再統合」するのだという。ワキは、なかなかすごい役割、力を持っている。

しかし、ワキはあくまでもシテの語りを引き出すためのみ存在するので、自分のことはほとんど語らない。そして無名である。それ故に亡霊と出会い、異界と出会うことが出来るという。ワキは何もせず、ただそこに存在するだけであり、ワキの最大の力は、霊であるシテに、出会いの相手として選ばれる力だという、著者はワキの持つそれらの力を「逆ナンパされる力」「消極的な力」と表現している。人は異界と出会う物語を求めるが、それはもう一度「新たな生を生き直す事ができるからだ」という著者の仮説に深い共感を覚える。

人間の本質をついた情念やおどろおどろしい世界、あの世とこの世の行き来の自在さ等、まさに現場に起こってくる様々な出来事や物語は、日本の古典芸能である能表現と低通するものがある。科学主義で見えなくなったしまった現代人の盲目をつき、隠れて見えない世界を、生き生きと再現し、貧困なイメージを広げ深めてくれるワキの力を解説する本書は臨床現場あるものにとって必読の書と言えるだろう。





## 平成19年度 事業方針

今年は「銀河の里」7年目を迎え、運営経営ともに草創期を経て、次のステップを歩み始めています。当初より高齢者福祉サービスは、介護保険事業を主に経営的には順調に推移しておりますが、個人情報保護や事業所における情報公開・評価事業など、「介護の質」を外部から厳しく問われています。また当法人のデイサービスとグループホームは、昨年度より地域密着型サービス事業の位置づけになり、管轄が花巻市に移っております。

知的障害者の福祉的就労の場としての「通所授産施設」は4年目を迎えます。昨年4月から障害者自立支援法が施行されましたが、当法人は支援法の先行きが不透明な為、移行猶予を受けて今年度も旧法体系をとりたと思っています。この法律施行によって、利用者には定率負担や食事の自己負担が発生したことで生活困窮が引き起こされ、法人は日払い方式や給付費単価の低下などで経営的に厳しい状況に追い込まれました。そのような状況に対して、国は19年度は激減加算を8割～9割に引き上げ、送迎加算を追加するなど緩和措置をとることになりました。また利用者の負担軽減も打ち出され、低所得者に手厚い対応をとるようです。

当法人としては、制度に振り回されることなく、授産科目である生産・加工・販売の各部門を強化していきたいと思っています。

### 事業内容

#### 【介護保険指定事業】

##### 第二種社会福祉事業

- ・居宅介護支援事業所「銀河の里」 平成13年1月
- ・通所介護「デイサービスセンター銀河の里」（定員12名） 平成13年4月
- ・サテライト事業所開始（定員10名） 平成18年3月
- ・痴呆対応型共同生活介護「グループホーム銀河の里」（定員9名×2ユニット） 平成13年4月

#### 【支援費指定事業】

##### 第一種社会福祉事業（旧法）

- ・知的障害者通所授産施設「ワークステージ銀河の里」（定員30名） 平成16年4月

##### 第二種社会福祉事業（自立支援法）

- ・障害者共同生活援助事業「グループホームみつさんち」（定員5名） 平成17年4月
- 「グループホームみなみ」（定員6名） 平成17年2月

#### 【委託事業】

- ・老人在宅介護支援センター（地域型） 平成13年4月
- ・花巻市高齢者生きがい活動支援通所事業（温泉デイ） 平成13年4月
- ・生活支援事業「配食サービス」 平成16年4月
- ・精神障害者社会適応訓練事業（花巻市・北上市） 平成13年4月

### 小規模・地域密着介護システムモデル事業実施報告

平成17年度8月より2年度にわたり、岩手県社会福祉協議会のモデル事業実施事業所として、夜間帯の通所介護サービス等の提供を行ってきました。

#### ○延長デイサービス

<利用人数> 平成17年度：延べ190人 平成18年度：延べ206人

<利用状況> ほぼ毎日サービスを実施している。定期で利用される方と共に、急な用事で利用される方にも対応してきました。通常のデイ利用が困難な方等、認知症対応型という専門性と、小規模ならではの柔軟なサービス提供を実施してきました。

<課題と今後> 必要な時間まで職員が1対1又は1対2でつくため、体制の確保が難しい。

今後、利用ニーズも高く、他部署の協力を得ながら、平成19年度も実施していきます。

#### ○ショートステイ

<利用状況> 平成17年度：延べ161日 平成18年度：延べ91日

<利用状況> 通所で慣れた環境での宿泊を希望されたり、他機関のショートが難しいケースに関して受け入れをしてきました。GHの協力を得ながら、家庭的な雰囲気、なじみの関係や環境に、落ち着いて過ごせる様子でした。延長DS同様、認知症対応型という専門性と、小規模ならではの柔軟なサービス提供を実施してきました。

<課題と今後> 対応スタッフの確保など、体制確保が難しい事がありました。また、人間関係の近さや、家庭的な雰囲気やグループでの生活は、かえって落ち着かず、過ごせない方もいました。必ずしも慣れた環境が良いとも限らない様です。その為、2ユニットのGHを活用、また他事業所の利用も検討してきました。ニーズとしては高く、平成19年度はデイサービスの自主事業（ナイトケア）として実施していきます。

### 編集後記

現在、1200枚の苗をハウスで大切に育てている。ハウスはトマトの定植の準備、田畑には肥料蒔きで忙しい。今年は「皆で農を支えよう。」と農業委員会を立ち上げた。これからじゃが芋の植え付けや田おこしそして田植えまで超特急の日々が続きそうである。

新年度となり、記事の募集を掛けたところ、これだけのエピソードが集まり、A3サイズ2枚の特大号となった。新しいスタッフを各部署で迎え、それぞれのエピソードがどう育まれ、私を含め、それぞれが成長していくか、とても楽しみに感じている。山有り谷有りの道のりを銀河列車は走り始めたばかりだ。（戸来）